

May, 1934.

43

居ないものであつたが、其標品のわきに本植物の種子として、入れてある一包がはつてある。

即ち北太平洋探險植物隊が宗谷海峡に於てシヨウジョウバカマ一種を採收せし時に本植物の種子と思つて其植物の下に落ちてゐるのを、かき集めて來たものであるは容易に首肯される。

此種子を見ると A. GRAY氏が前記四一六頁の記事と大體よく符合する、然し此種子はシヨウジョウバカマ屬の種子ではない、よく見ると此種子は *Luzula pallescens* BESSER) 近似品のものである。

それで A. GRAY氏が *Helomias* から *Helomiopsis* を區別したのは、氏の記事にも見る如く主として其種子の形態に主をなしてあるのを見ても、氏の *Helomiopsis* 屬は設立を許されない、シヨウジョウバカマ屬の種子ならば外部形態に於ては殆ど *Helomias* の種子と區別はないのである。

故に予は1930年、予の *Florae Symbolae Orientali-Asiaticae* 九四頁に於てシヨウジョウバカマ屬の學屬名としては、1867年 F. A. G. W. MIQUEL氏が *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, Afdeling Natuurkunde, Tweede Reeks, Tweede Deel*, 八八頁に發表した *Sugerokia* MIQ. を採用すべきものなる事を書いてをいた。

羊 齒 植 物 雜 錄 3.

田 川 基 二

(14) *Dryopteris viridescens* O. KUNTZE

1867年に BAKER は *Nephrodium viridescens* BAKER といふ新種を記載した⁽¹⁾、原記載には唯 Japan, *Oldham*, 89, 377 と書いてあるだけで、OLDHAM が日本の何處で採集したものかは知る由もないが、OLDHAM 採集の他の植物から推察すると長崎あたりと考へられる。その後本種の記事は諸書にでてゐるが、彼の有名な FRANCHET, SAVATIER 合著の日本植物目録の本種の條下に *Japonice.-Kojane warabi* (Keiske) と記されて以來⁽²⁾、日本の學者はコガネワラビ即ちリヤウメンシダが本種であると考へて近年までその學名に *Dryopteris virescens* (BAKER) O. KUNTZE を用つてをつた。けれどもこれは大きな誤であつて *Nephrodium viridescens* BAKER はどうしても今日ナガバノイタチシダと呼んでゐるものでなくてはならぬ。特に本州、四國、九州のナガバノイタチシダは BAKER の種類によく一致するものである。ナガバノイタチシ

ダは本州では分布が狭いが（駿河、志摩、紀伊、近江、山城等）四國や九州では珍くはなく、更に琉球や臺灣にも澤山にある。以前にはミヤマイタチシダと混同せられてゐたが何時の間にか區別せられてナガバノイタチシダと呼ばれ、學名には *Dryopteris sparsa* O. KUNTZE が用ひられてゐる。この *D. sparsa* の type locality はヒマラヤであつて、ナガバノイタチシダの發育の悪いものを想像すればよい。セイロン、南支那、馬來、フィリッピン等分布はかなり廣く、そのうへ變化にも富むものである。京大の腊葉室にはこのナガバノイタチシダの標本が日本各地から澤山に集つてゐるが、これを精細に比較してみると琉球、臺灣のものは本州、四國、九州のものと多少形を異にし、よほど *D. sparsa* の正型に近いものゝやうに思はれ、その變化性も更に大である。*Dryopteris subexaltata* C. CHR. とか *D. Hayatai* TAGAWA とかいふ種類は皆このうちの一型ではないであらうか。そこでナガバノイタチシダ、少くとも本州、四國、九州のナガバノイタチシダは *Dryopteris viridescens* O. KUNTZE であると斷定はできるが、さてこれが *D. sparsa* と同種であるか否かと云ふことは大に研究を要する問題であつて、歐洲の學者中には同種であると考へてゐる人もあるが、私は頗るよく似た種類であるといふ程度に止めておかう。

かくて *Dryopteris viridescens* O. KUNTZE はナガバノイタチシダであるといふことになる、リヤウメンシダの學名如何といふことが次の問題になる。

(15) リヤウメンシダの學名

本種は分布の廣いもので日本では北海道、本州、四國、九州、朝鮮(濟洲島)、臺灣(阿里山)の山地に大群落を作るものである。前項述べたやうに近年まで學名には *Dryopteris viridescens* O. KUNTZE が用ひられてゐたが、ナガバノイタチシダとは雲泥の差のあることはいふまでもない。本種がはじめて世に出たのは1863年のことで T. MOORE が栽培品に *Lastrea Standishii* MOORE と命名したのにはじまる⁽³⁾。翌年には METTENIUS が *Aspidium laserpitiifolium* METT. といふ新種を發表し、同時に圖も附してゐるがこれはリヤウメンシダの小さい葉である。*L. Standishii* と *A. laserpitiifolium* とが同種であることは BAKER も注意してゐる⁽⁴⁾。故に、リヤウメンシダの正しい學名は *Polystichum Standishii* C. CHR. である。

所が牧野先生はミドリカナワラビといふ一羊齒の學名に *A. laserpitiifolium* を用ひられたことがある。従て第三の問題はミドリカナワラビの學名如何といふことである。

May, 1934.

45

(16) ミドリカナワラビ

本種はカナワラビ *Polystichum amabile* J. SMITH に似てゐるが、葉柄の基部は少々紅紫色を帯びること、葉片は三回羽状複生なること、鋸齒は一層鋭いこと、囊堆は中脈と邊緣との中間に位置すること等によつて區別できる。本州(伊豆、大和、紀伊)、四國(伊豫)、九州(筑前、肥後、日向、薩摩)に分布する。

牧野先生は本種の學名に *Aspidium laserpitiifolium* METT. を用ひ⁽⁵⁾、後精細な記載文も發表せられたが、⁽⁶⁾ 前項の理由で好ましくない。所が1914年に至り、ROSENSTOCK は FAURIE が伊豆國湯ヶ島で採集した no. 57 を新種となし、***Polystichum nipponicum*** ROSENST. と命名したが⁽⁷⁾、圖らずもこれが牧野先生のミドリカナワラビであつた。従て本種の正しい學名はこの ROSENSTOCK 命名のものである。これよりずつと以前に CHRIST は同じく FAURIE が九州の市房山で採集した標本を *Aspidium affine* WALL. と檢定したこともあつたが⁽⁸⁾、これもミドリカナワラビである。

日本植物總覽では *Polystichum Standishii* C. CHR. の和名をヲカナワラビ一名ミドリワラビ(正しくはミドリカナワラビ、松村博士の帝國植物名鑑に誤つてミドリワラビとなつてゐる)とし、その記載文がミドリカナワラビに適合しないのは前述した誤の名残である。

(17) *Aspidium polyblepharon* ROEMER

本種は1848年に KUNZE によつて發表せられた日本羊齒類の一であるが⁽⁹⁾、例により日本の何處で採集せられたものかは不明である。近年中井教授は本種とヒメカナワラビとは同種であるとなし、ヒメカナワラビの學名を *Polystichum polyblepharum* PRESL と改められたが⁽¹⁰⁾、この處置には賛成できない。KUNZE の原記載より判斷するも、亦小泉先生が滯歐中に type specimen からとられたノートを拜見しても、本種が日本の植物である以上はキノデと考へるのが至當であらう。しかも九州や四國の低地には澤山にある、表面の光澤が強く、美しい褐色の鱗片が密生して頗る壯觀を呈する一型のキノデと考へたい。しかしキノデを獨立の種と考へざるかぎり、その學名は *Polystichum aculeatum* SCHOTT var. *japonicum* CHRIST であつて *Aspidium polyblepharon* ROEMER や *Polystichum polyblepharum* PRESL はその異名となることは當然であり、又ヒメカナワラビの學名が依然 ***Polystichum Taus-simense*** J. SMITH であることも明である。

(18) 再びイエジマチヤセンシダに就て

イエジマチャセンシダに就てはすでに昨年報告しておいたが⁽¹¹⁾、最近沖縄縣の多和田眞淳氏の好意により伊江島産の標本を寄贈せられたのでヒメチャセンシダと精細に比較することができた。本種はヒメチャセンシダに頗るよく似たものであるが、全體に繊細で葉柄や中軸の太さは半分にも満たず、羽片は長さに対して幅が廣く、又逆行する程度が少々強いので中には扇形を呈するものもある。葉質も比較的薄いやうである。故にヒメチャセンシダの變種として學名を次の如く改めやう。

Asplenium oligophlebium BAKER var. **iezimaense** TAGAWA, comb. nov.

Asplenium iezimaense TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. II. p. 200 (1933).

Asplenium Fauriei (non CHRIST) KODAMA in MATSUMURA, Ic. Pl. Koisikav. I. p. 89, Pl. 45 (1912);—MAKINO & NEMOTO, Fl. Jap. p. 1580 (1925);

Nom. Jap. Iezima-tyasensida. イエジマチャセンシダ

Hab. Ryukyu : insl. Ie-zima (S. TAWADA, no. 91, Dec. 26, 1933).

- (1) HOOKER & BAKER, Syn. Fil. 275 (1867).
- (2) FRANCHET & SAVATIER, Enum. Pl. Jap. II. 241 (1876).
- (3) MOORE in Gard. Chr. 1863. 292.
- (4) BAKER in HOOKER & BAKER, Syn. Fil. ed. 2, 254 (1874).
- (5) MAKINO in Bot. Mag. Tokyo, X. 286 (1896).
- (6) MAKINO in Bot. Mag. Tokyo, XV. 64 (1901).
- (7) ROSENSTOCK in FEDDE, Repert. XIII. 130 (1914).
- (8) CHRIST in Bull. Herb. Boiss, sér. 2, 1021 (1901).
- (9) KUNZE in Bot. Zeit. VI. 572 (1848).
- (10) NAKAI in Bot. Mag. Tokyo, XXXIX. 117 (1925).
- (11) TAGAWA. in Acta Phytotax. Geobot. (植物分類地理). II. pp. 200, 217 (1933).

傳説の植物「御綱柏」

宇井 縫 藏

一、御綱柏の名の文献にあらはれた最初は古事記であつて、高津宮中巻に「自此後時太后、爲將豊樂而、於採御綱柏、幸行木國之間、天皇、婚八田若郎女、於是大后、御綱柏積盈御船還幸之時云々」とあり、日本書紀にも「仁德天皇、三十年秋九月乙